「教育実習を終えて」

[公立高等学校　国語]

まず、３週間「実習生」と言う肩書きではあるものの、社会人の中に混ざって過ごし、自分にもその人達と同じ言動を求められる環境に身を置けたことで、仕事ができるかどうか以前のマナー、立ち振る舞いなど、大人としての基本を少しでも学べたのではないかと思う。

１番苦労したのは、「生徒との距離感」の取り方であった。私が今までの人生で確立してきた人間関係の構築のしかたを、担当の先生には真っ向から否定された。「先生としての自覚に欠ける言動」という言葉を何度言われたかわからない。授業における前置きの雑談、笑いの取り方など、授業準備の段階で「このタイミングでこのことを話そう」と考え、計画しての発言を指摘されることが多かったので、正直にいうと納得できない部分もあった。「それはあなたの好き嫌いじゃないのか？」「担当の先生が別の人だったらこんなこと言われてないんじゃないか？」と思ったこともあった。自分の人格ごと否定された気分になったりもした。実習に同じタイミングで行っていた友達とも何度も話した。彼も同じような悩みを抱えていた。彼と話しているうちに思った。この悩みを持てるのは本当に先生になりたい証なのかな、と。自分のスタイルを出して、こういうことを実践しようという理想を持っている証拠だなと二人で話した。そして、この理想を実現させるタイミングは、実習生としていわば「保護付きの体験」をしている今ではなく、本当に先生という称号を貰った後だという結論に行き着いた。担当の先生が、自分の理想だけを僕らに押し付けているのではなく、「どこの学校に赴任することになっても間違いのない」いわば平均のような教えを施してくれていたということに気づいたのはかなり後になってからだったが、教育実習に対して私が抱いていたものと現実とのギャップに苦しんだのが１番辛かった。

それでも、悪いことばかりではなかった。幸い、授業の進め方、教え方などで特に指摘をされることは無かったし、「基礎はちゃんとできている」と褒めてもらえたし、何より温かい生徒たちに本当に助けられた。出会って何日も経っていないのに、進路の相談や、他の授業でわからなかったところを質問してきてくれたり、生徒の存在がモチベーションになることを実感した。授業をした回数は２０コマにも満たなかったが、彼ら、彼女らに少しでも多く、確実に伝えられるようにと考えて授業準備や HR にも熱を入れることができた。最終日、朝礼、終礼の時間でしか関わることのなかったクラスから色紙をもらえた時は大きな達成感があった。メッセージの中に「先生の HR はとてもわかりやすかった」と書かれており、工夫した甲斐があったなとも思った。たった３週間で、先生という仕事の全てを把握できたとは思っていないが、生徒のためなら自分を投げ打つ気持ちがわかった気がした。

私は、実習に行く前から、もっと言えば、３年生での事前指導を受講し始めた頃から、今年の採用試験を受けるつもりはなかった。実習の担当の先生にもそれは正直に伝えた。実習終盤「君は一般企業に行くと聞いていたが、私が過去に担当した子たちと何の遜色もない熱量が感じられた」と言ってもらえた。当たり前だ。私はあくまで遠回りをするだけだから。一般の社会を見て、そこで感じたこと、経験したことを生徒に伝えられる先生になりたいとずっと思っていた。今回の実習で、その気持ちがより強い目標に変わった。当たり前だとは言ったが、担当の先生にもその思いが伝わっていたとわかって嬉しかった。テスト期間から実習が始まり、最終週には３者面談が食い込むという、本当にご多忙な中、時には厳しい言葉でご指導くださった先生方には本当に感謝の念でいっぱいだ。この３週間をずっと忘

れず、自分が教壇に立った時に少しでも立派に振る舞えるよう、これからの生活を送りたい。